



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アートを核としたコミュニティに見られる「生きづらさ」を乗り越える契機とエンパワメントについて : 札幌のOY0Y0ゼミの事例から
Author(s)	加藤, 康子
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 20, 35-54
Issue Date	2015-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59350
Type	departmental bulletin paper
File Information	03.Katou.pdf



アートを核としたコミュニティに見られる「生きづらさ」を乗り越える契機とエンパワメントについて —札幌のOYOYOゼミの事例から—

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

加藤 康子

加藤
康子

KATOU Yasuko

The Moment of Overcoming the Difficulties of Living and Empowerment That be Found in an Art Community: A Case Study of "OYOYO ART CENTER SAPPORO"

KATOU Yasuko

abstract

The "OYOYO" is an art community organization operated by members of a civic volunteer group in Sapporo.

Through their activities the members of OYOYO attain the skills to overcome the difficulties of daily living in Japanese modern society and empower others will being.

Although OYOYO is a specialized community in arts, why does this community exercise such an empowering function?

This paper provides several lines of evidence that an art community organization can function as "the intermediate area where anybody can negotiate a framework of values throughout their actual practices and conversations. This study will explore generating mechanisms of empowerment by participant observation research.

1 はじめに

本研究は、札幌の都心部で2008年から活動が続けている市民有志による趣味縁¹のコミュニティ「OYOYO（発音：オヨヨ）ゼミ」において、活動に参加するメンバーに自己肯定感や積極性の増加などのエンパワメントが構造的にもたらされていることを、活動プログラムや組織の性格および先行研究の諸理論に照らして、解き明かす試みである。

対象事例としたOYOYOゼミは、美術部や写真部など「部活制」による「大人の放課後」を謳い文句に2008年に設立された市民有志の活動拠点であり自主運営組織である。現在では場所を指す場合には「OYOYO」（正式名称：OYOYOまち×アートセンターさっぽろ。中央区南1条西6丁目第2三谷ビル6階に入居）、そこを拠点に活動する集団を指す場合は「OYOYOゼミ」（正式名称：OYOYOゼミプロジェクト）と呼び分けている。筆者は2010年12月から正式な部員として美術部（当時）に入部して参与観察を続けるうちに、メンバー数名に共通して、コミュニケーション能力や協調性、自己肯定感の増強、創作活動の活発化などの変化が起きていることに気付いた。これらの変化は、個々の事情や環境からではなくOYOYOゼミへの活動参加によるものなのだろうか。もしそうであるとしたら、クロッキーや公開講座など主にアートを中心とした活動の何から、本来は意図していなかったエンパワメントが発生しているのだろうか。これらの疑問に答えるために本研究では、教育学の宮崎隆志による「生きづらさ」および「中間地帯」の研究²と保健学の安梅勅江のエンパワメント研究³に着目した。

宮崎は一連の研究を通じて、現代社会では個々の市民が全人的な能力や個性を発揮することがますます困難になってきている現状と、高度経済成長期に始まる企業側による生活空間の合理化により1980年代以降「中間地帯」が実質的に消失したこと、および「中間地帯」再建の社会的必要性、解決策の一つとしての「重なり合う実践コミュニティ」⁴の可能性に言及している。宮崎の指摘は、筆者がOYOYOゼミへの活動参加を通して感じた現代社会における市民個々の生活圏外や職場圏外での専門性や多様性の居場所のなさを理論的に裏付けるものであった。

また、OYOYOゼミのメンバーにみられる上記のような共通の変化については、エンパワメント概念を援用して説明を試みる。保健学の安梅は、エンパワメントについて人を「元気にすること、力を引き出すこと、きずなを育むこと、そして共感に基づいたネットワーク化」と定義している⁵。つまり、人が本来持っている能力（パワー）を生き生きと発揮できるような人的な関係・環境作りこそがエンパワメントという考え方である。安梅のエンパワメント研究は、OYOYOゼミの一部のメンバーの行動変容の多くに当てはまり、その普遍的な要因を分析する上で有効であった。

本研究の方法は参与観察と質的分析であり、主たる資料は2010年12月以

▶1 浅野智彦（2011）『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店。

▶2 宮崎隆志（2013）『「中間地帯」の再建による社会空間の変容』日本社会教育学会60周年記念出版部会『希望への社会教育』東洋館出版社：宮崎隆志（2007）『システム社会における生きづらさの構造』『子ども発達臨床研究』創刊号pp.39～44.

▶3 安梅勅江（2005）『コミュニティ・エンパワメントの技法～当事者主体の新しいシステムづくり～』医歯薬出版株式会社。

▶4 宮崎隆志ほか（2014）科研報告書「移行支援実践におけるコミュニティ・エンパワメントモデルの開発」（研究代表：宮崎）参考資料3 pp.143～148.

▶5 安梅（2005）p.5.

来筆者がOYOYOの部員として内部で収集した活動記録や個別インタビュー、アンケートなどの一次資料、およびOYOYOを巡る文献調査などの関連二次資料である。

本稿の議論では、宮崎が現代社会において実質的に消失したとする「中間地帯」に替わり、アートを核としたコミュニティが、個々の市民が各自の潜在的な能力や趣味関心、全人性などを発揮する実質的な受け皿、すなわち新たな社会空間として立ち現れていることをOYOYOの活動事例から明らかにする。趣味や遊びの場によって個人に蓄積された経験や固有性、多様性を発現させる正統性を保障することは、結果的に本人へのエンパワメントをもたらし、更には個人に潜在する資源を社会的に価値化してゆく経路を社会にもたらす。

以下、議論の背景としての「生きづらさ」問題、「中間地帯」概念、対象事例OYOYOゼミの組織と活動内容の紹介、エンパワメント概念の紹介とOYOYOゼミにおけるエンパワメントの検証、OYOYOゼミの活動が失われた「中間地帯」を代替する社会空間となる可能性を孕んでいること、の順に論じてゆく。

2 | 背景としての「生きづらさ」と「中間地帯」の消失

本稿の議論に先立つ前提概念として、宮崎の「生きづらさ」および「中間地帯」の研究を参照する。「生きづらさ」という言葉は、筆者がOYOYOメンバーに行ったアンケート調査（後述）の追加取材で、OYOYOゼミ部長のS氏が回答してくれた文章の中でも、次のように触れられている。

OYOYOは、主催者がはっきりとしたイメージコントロールができなかったもので、たまたま誰でも受け入れるようになった。その中には、最先端の文化やまちづくり的なものも時折あるけれど、都市の中で生きづらいかもしれない人々も自然に集まっている⁶。

▶6 2014年12月11日筆者の追加取材に対しメールで回答を得た。

S氏はOYOYOの設立準備段階から構想に関与しており、本業は地元のアートNPO代表である。創立当初は美術部長、現在はOYOYOゼミ部長という立場から、OYOYOの歴代メンバーや活動の推移を見守り続けてきた。OYOYOには創立からの約6年間、所属も年齢も関心領域も様々な人々が集い共に活動している。その中では、各種の障害を持つ人や極度に感受性が強いメンバーなども参加していた。だが本研究では、問題を構造的に捉えるために、OYOYOメンバーの個別事情を超え、日本の現代社会の共通背景としての「生きづらさ」を踏まえるところから議論を始める。

2-1 「生きづらさ」問題

宮崎は、今日の日本社会の「生きづらさ」について、「現代における商品化の進展は、商品・資本が主体となって自己展開する社会システムを成立させ、個人はその下で分断され、引き裂かれている」とする⁷。つまり、企業が求める「労働商品としての自分」と、そこから絶えずこぼれ落ちる「それ以外の自分」あるいは「本来の全体的な自分」との間で個人は本質的に引き裂かれ続ける。こうして社会の構成メンバー全員が同じ「生きづらさ」を感じているにも関わらず、それに耐えて弱音を吐かずに突っ張る努力をすることが「正常」の範疇と看做される。続けて宮崎はこの「正常」概念を「商品化された社会のルールを内面化しているもの」とし、労働力として商品化できることこそが正常化と見做され、そのような社会システムから距離を置いた者は「逸脱」のレッテルを貼られると論じる⁸。今日では生活空間までも企業によって合理化され、個人は労働商品として社会に位置づけられると宮崎は指摘する⁹。本稿が対象事例とするOYOYOゼミの現在のメンバー全員が現役の職業人もしくは就労経験者であることから、宮崎の分析は個別事情を超えた共通の社会背景と見ることができる。

また、非正規雇用の拡がりに見られるように、企業は労働者を選別して安易に使い捨てる傾向を強めている¹⁰。そうした職場環境において市民は、労働商品として求められる以外の個人的な専門性や趣味領域を発現することに慎重にならざるを得ない。迂闊な発現は、職場の競争で足を引っ張られたり、マイナス評価や排除の原因にもなりかねないからだ。特にその内容が社会的認知度の低い領域のものであったり、先鋭的もしくは専門的であるなどして一般に共有されにくい場合は尚更である。

だが言うまでもなく、労働商品として求められる自分は、各自の経験や専門性、技能、個性などのうちの一部に過ぎない。ここに宮崎の指摘する、社会生活の中での個人の分断と「生きづらさ」が構造的に発生する。

以上、現代社会における日常的な「生きづらさ」と、個々の多様性・固有性の発現が困難である現状を以下の議論の前提として踏まえておく。

2-2 「中間地帯」の消失

そうした現代社会の「生きづらさ」に対抗する社会空間の可能性を本稿では、札幌のアートを核としたコミュニティの事例から追っていく。検証に先立ちもう一つ「中間地帯」という宮崎の研究概念を参照する。宮崎は、「生きづらさ」に対抗する社会空間として直接明言してはいないものの、「中間地帯」という用語を以下のように定義している。

中間地帯は労働世界と生活世界の干渉・交渉の場であるが、それは市場に振り回されるのではなく、人間的な生の意味を求めた試行錯誤や挑戦などの主体的対応の可能性を含んだ空間、つまり日本国憲法25条から28条まで（9条13条を前提とする）が構成する空間をも意味している。当事者側から見れば、当該社会と対峙しつつ自己形成のモデルと出会い、

▶7 宮崎（2007）p.41.

▶8 宮崎（2007）p.41.

▶9 宮崎（2013）p.107.

▶10 宮崎（2007）p.42.

▶11 宮崎（2013）p.106.

自己を形作る空間と言ってもよい¹¹。

宮崎はこうした中間地帯の具体例として、1970年代までの青年学級・サークルの存在を挙げ、以下のように説明する。

それによって、若者たちは合理化された労働の場や学校から距離を置き、自分たちの実際生活の経験の総体を振り返り、対象化することができた。社会空間に周縁的に参加する新参者でありながらも、協働の経験を通して固有の価値を有する参加者であることを自覚し、当該社会空間の全体像を見通す学習とそれに働きかける実践が展開していた¹²。

▶12 宮崎（2013）p.109.

続けて宮崎は、1980年代以後「労働過程の合理化を起点として構築された合理的システムが、学校や家庭を飲み込む形で完成」し、上述のような中間地帯が社会空間の中から消失したとする¹³。そしてそのような「集団的に人生物語を構築できる場を協働で作り出すことの社会的な必要性」を述べる¹⁴。そして中間地帯を社会空間に再建するには、それが「重なり合う実践コミュニティ」であることの重要性を指摘する¹⁵。「重なり合う実践コミュニティ」の事例として宮崎は、井沼淳一郎の高校での授業実践を挙げている¹⁶。教室という学びのコミュニティとアルバイト先での労働コミュニティが、生徒達がアルバイト先から雇用契約書をもたらってきて授業の教材とすることで重なり合った事例である。

▶13 宮崎（2007）pp.39～44.

▶14 宮崎（2007）p.109.

▶15 宮崎（2013）p.111.

▶16 宮崎（2013）p.111.

以上、宮崎によれば、現代の日本社会は個人を「労働商品」として位置づける社会システムとして動いており、市民個々には常に自己を分断する「生きづらさ」が構造的に作用している。また、労働過程の合理化が学校や家庭の領域までも飲み込む形で再編され、両者の「中間地帯」であったものが事実上消失した。旧来の社会構成単位であった家族・地域・階級なども崩壊し、裸の個人が社会システムに直接晒され、社会との接続関係を自己責任で維持しなくてはならない時代に入っていると宮崎は論じる¹⁷。

▶17 宮崎（2013）pp.99～100.

そのような時代状況において、本稿が対象事例とするOYOYOゼミは、従来のアートによる趣味縁集団であるに留まらず、新たな「中間地帯」的な機能を帯びた社会空間としても立ち現れるようになった。以下、対象事例のOYOYOについて設立経緯、組織、OYOYOで扱われるアートや活動内容について記述する。

3 対象事例：OYOYOゼミとは

3-1 OYOYOの設立

本稿が対象事例とするOYOYOは、札幌都心部の雑居ビルで2008年5月から市民有志が自主運営する、まちづくり・アートの活動拠点として始まっ

た¹⁸。運営システムとして、学校の課外活動を模した「部活制」が採用された。利用者が希望する部活に入部して毎月部費を支払い、その固定収入で自主独立、持続可能な運営を行うという方法である。また、受動的な利用では創造的な拠点にならないという考えから、利用者に施設のオーナー兼運営者として主体的に関与してもらうための組織形態でもあった。

2000年代後半の札幌都心部には、小規模なアート拠点の参入が相次いだ。部活制を根幹としたのはOYOYOのみである。このような運営形式は全国でも類例が見当たらなかった。アート拠点の多くは、代表や幹部が企画や運営を決定し、スタッフがその実現を助ける体制をとる。部活制の採用は、その後のOYOYOの性格形成に大きく影響を及ぼすことになった。

当初は写真部、図書部、美術部など10部活で各部10人程度が想定され、曜日と時間を決めて、複数の部活がOYOYOの空間を棲み分けて活動した。その後、何度かの制度変更を経て、2012年5月には当時活動していた美術部、写真部などがOYOYOゼミとして一本化され、今日に至っている。

OYOYOは通常のアート拠点やギャラリーと異なり、常駐の管理者を置く経済的余裕がなかった。このため2014年現在では、代表で音楽プロデューサーのK氏がOYOYOの一角を本業の事務所に在勤し、必要な対応を補っている。

3-2 OYOYOゼミの組織

現在のOYOYOゼミは、元プロや現役の制作者と、制作は一切行わず鑑賞専門の者とが混在する。常連メンバーは2014年10月現在で約10名強であり、内訳は国家公務員、元自衛官、音楽や美術など各種プロデューサー、学生、主婦、ダンス教師、事務員、経営者、アーティスト、NPO代表など様々である。年齢は20代から50代までが在籍している。正式メンバー（部費を支払う部員）以外にも、OYOYO内にあるカフェ（有料：代表のK氏が運営）の常連客や企画に応じて外部講師やゲスト、見学者、公開講座の一般参加者などと外部の人員を状況に応じて活動に呼び入れている。

部活制で全員が同額の部費を負担するため、メンバーは諸権利において原則平等が前提とされ、全員がゼミ運営への発言権と参加権を持つ。また代表や部長などの役職者はいるが、OYOYOゼミの活動や運営上でより大きな権限を持つ訳ではない。重要な案件は打ち合せの参加者全員で協議して決定される。企画や提案の内容は原則自由であり、実施を承認されれば全員で実現に協力する。参加や提案は部員の権利ではあるが強制されることはなく、仕事の都合や興味に応じて各自が望む形と頻度で参加可能である。2012年頃からメーリングリストで毎週月曜の定例連絡が行われるようになり、最新の決定事項や活動予定について前回欠席者を含め全員がリアルタイムで情報を共有している。

OYOYOのコミュニティの特質としての水平志向の組織運営や相互の対等な関係は、後述するエンパワメント発動の大きな要因となっていく。

▶18 当初はアートに特化した拠点として構想された訳ではなく、大通地区の比重低下と空洞化に危機感を抱いた当時の商工関係者やまちづくり関係者らによるモデル実験として構想されたのが始まりであった。当時、ビルオーナーの逝去により、大通地区の第2三谷ビル（1963年建築）の建物6階南側全面の空間（当時は床面積156m²）が空室となった。オーナーの居室兼事務所であったため、風呂や和室、調理室などを備えたオフィスビルとしては異例の空間だった。この空間を月額賃貸で借り受ける形でOYOYO設立準備が具体化した。2008年5月「知る、遊ぶ、発信する。まちなかの放課後」をコンセプトにオープンした。

▶19 初期段階では定例活動日に「ただ何となく集まっていた」時期もあったが、多忙な社会人メンバーが多い中、週一回の活動時間を有効活用するために、徐々に事前に活動内容を決めるようになった。

3-3 OYOYOゼミの活動内容

2014年現在のOYOYOゼミでは、毎週木曜夜20時からの2～3時間を定例活動日としており、ここ数年は以下に挙げる9種類の定番プログラムを随時組み合わせる形で運営されている。活動スケジュールは、定例会の打ち合わせで事前に決定される¹⁹。

【OYOYOの活動プログラム】

①打ち合わせ、②ワークショップ、③お宝鑑賞会、④部員相互レクチャー、⑤公開講座、⑥マチ歩き、⑦企画展、⑧出版物の企画編集制作、⑨その他

以下、順に活動内容を説明する。

① 打ち合わせ

今後の活動予定や運営などについて参加者全員で協議し、OYOYOゼミとしての意思決定を行う。月一回以上の頻度で開催される。発表や企画の提案はメンバーの自主性と都合に任されている。原則として協議の場では全員が対等な発言権を持つ。必要な議論と同時に、雑談の割合もかなり高い。

② ワークショップ

部員自身もしくは部員の知人友人が講師となり、技術や知識の体験型の教室を開く。クロッキー、フィギュアの撮影技術、紙漉き、羊毛手芸、消しゴムハンコ作り、チョーク絵画や曼荼羅講座など、参加者が実際に手を動かしてモノを作る。講師役もしくは企画提案者が受講者の材料手配から必要に応じてのマニュアル作成、当日の指導などを行う。

③ お宝鑑賞会

OYOYO内部のみで行われる企画である。「私のお宝」と題して、短編映像、お勧め本、好きな曲、趣味の逸品などテーマを決めて一人一品を持ち寄り、各自5～10分程度でプレゼンテーションを行う。メンバーが好きなモノに寄せて語る内容は、各自の人生経験や感受性、価値観に深く根ざしていることが多い。そのため、新入メンバーのお披露目や相互紹介にも大変有効なプログラムとして活用されている。

④ 部員相互レクチャー

部員の一人が講師となって、自らの専門や趣味領域について他の部員に向けて座学形式でレクチャーを行う。スライドの利用も多い。テーマは自由で、鉄道趣味、葬儀の仕事、美少女ゲームの歴史、自転車旅行の報告、漫才、明治の鳥瞰図、震災とアート、絵本の世界、古墳や競馬など多種多彩なテーマが登場した。講師希望者は事前に申し出て①で承認を得る。

⑤ 公開講座

外部講師の協力を得て行う公開講座である。これまでマンホール研究、銭湯事情、札幌市電唱歌、ラブフルート制作と演奏、SF作家荒巻義雄氏の講演、ロゴセラピー、博物館スタンプ蒐集、北都プロレス10周年記念ファンイベントなどを開催してきた。定員は空間の制約から最大50人程度である。担当者

は企画立案から講師との交渉、資料準備、必要な機材の手配までを担い、残りの全員が告知や運営その他をサポートする。

⑥ マチ歩き

市内外のアート関係のスポットやイベントを有志で探訪する。OYOYOのホールレンタルと活動日が重複した場合にも活用される。定例活動日以外に休日などを使った有志による長距離遠征もある。ここ数年は、地理学に長け道内各地への出張経験が豊富な部員がオリジナルな旅行プランを提案しており、毎回参加者から好評を博している。

⑦ 企画展

OYOYO全体を会場に年2回の企画展をOYOYOゼミで主催する。時期は夏～秋と冬の各1回である。毎回テーマを設定し、メンバー個々人が制作した作品を合同展示する。場合により一般からの出展公募も行う。展示期間中にはパフォーマンスやライブ、飲食の販売を行う場合もある。

⑧ 出版物の企画編集制作

OYOYOの記録と活動紹介の出版企画である。原則OYOYOの全員が取材や執筆を分担する。これまで2009年（冊子形式）と2012年（電子書籍）の2回にわたりOYOYO本を出版した²⁰。

⑨ その他

上記①～⑧以外の活動である。OYOYO関係者有志が手製カレーを持ち寄り、料理の腕前を競う「カレー対決」や公開忘年会などがある。

OYOYOゼミでは、この①～⑨のプログラムを組み合わせる形で運営されている。以下に例として2014年4月～6月の実際の活動内容を紹介する。

開催日	プログラム区分	開催内容
4月 3日	①打ち合せ	打ち合せ
4月10日	①打ち合せ	打ち合せ
4月17日	⑤公開講座	くるくるアニメを作ろう（外部プロ講師） 講師：北海道アニメーションプロジェクト「+A」より いがらしなおみ、河原大、斉藤栄子、横須賀令子
4月24日	⑤公開講座	人形師 沢則行スライドトーク（外部プロ講師）
5月 1日	お休み	連休のため活動はお休み
5月 8日	③お宝鑑賞会	テーマ：今年のマイブレイク
5月15日	⑥マチ歩き+①打ち合わせ	三吉神社祭り見学と打ち合せ（外部の喫茶店にて）
5月22日	⑤公開講座	SF新刊イベント 『北の想像力（北海道文学）と〈北海道SF〉をめぐる思索の旅』（寿郎社）刊行記念「『北の想像力』の可能性～SF・怪奇幻想・アイヌ口承文芸」 出演：岡和田晃、巽孝之、三浦祐嗣、松本寛大、丹菊逸治
5月29日	①打ち合せ	打ち合せ（企画プレゼン大会）
6月 5日	②ワークショップ	製本講座（部員講師）

▶ 20 大通まち×アートセンターOYOYO（2009）『まちとアートのOYOYO本』、大通まち×アートセンターOYOYO：OYOYOゼミ（OYOYOまち×アートセンターさっぽろ）（2012）、電子書籍『OYOYO MAP 2012』OYOYOゼミ（無料ダウンロードで配布中）
http://dopub.jp/products/detail.php?product_id=242 2014年9月20日最終閲覧。

6月12日	④部員レクチャー	保険の仕組み（部員講師）
6月19日	①打ち合せ	打ち合せ（外部の喫茶店にて）
6月25日	①打ち合せ	打ち合せ

上記は公開講座が平均よりやや多いが、それぞれにメンバーの得意分野や人脈が持ち込まれており、内容的にもかなりのバラエティが見て取れる。

OYOYOゼミのプログラムの多くは、本質的にアートを入口にした参加者全員によるコミュニケーションとしてデザインされている。メンバー個々に蓄積された知識、技能、感受性、経験などの人的資源が主な活動コンテンツである。背景としては、創立当初からOYOYOの資金繰りに余裕がなく、参加者自身の人的資源を活用する方向で発展せざるを得なかったことも無関係ではないだろう。活動プログラム全体がメンバーの自主的な楽しみの場としてデザインされているが、同時に「学び」を生み出す「対話の機会」²¹ともなっている。

OYOYOゼミには「アートが好き」という共通項のもと、職業も出身も趣味領域も多種多様なメンバーが集う。各自が多忙な社会生活の傍ら、余暇や楽しみの範囲内におさめて無理なく担える形での自主運営が模索され、活動プログラムも未だ固定することなく試行錯誤を繰り返している。

3-4 OYOYOゼミにおける「アート」とは

OYOYOゼミで扱われているアートについて、ここで改めて検討したい。定例活動では、クロッキーやチョーク絵画講座など、いわゆるオーソドックスなアート領域でのプログラムと同時に、プロレス公開講座や美少女ゲームの歴史、マンホール研究など「なぜ、これがアートなの？」と一般には疑問に思われるような企画もよく登場している。OYOYOゼミで扱うテーマについて明文化された規約は特に存在しない。すべての企画提案は、定例会の打ち合わせの参加者全員で協議し、了解が得られればアートとは一見関係ないように見える企画であっても実現してきた。では一体何がOYOYOゼミにおけるアートと考えるべきであろうか。

ここでのアート概念を検証するにあたり、美学研究の佐々木健一による「芸術」の概念定義が、OYOYOの現状を的確に説明していると思われるので、以下参照する。

人間が自らの生と生の環境とを改善するために自然を改造する力を、広い意味でのart（仕業）という。そのなかでも特に芸術とは、予め定まった特定の目的に鎖^{とど}されることなく、技術的な困難を克服し常に現状を超え出てゆこうとする精神の冒険性に根ざし、美的コミュニケーションを指向する活動である。この活動は作品に結晶して、コミュニケーションの媒体となり、そのコミュニケーションは、ある意図やメッセージの解説というよりも、その作品を包摂性としての美という充実相において現実化する体験となるのが、本来のあり方である。およそ文化現象は、政治や宗教を見ても分かるように、時代や場所によって、その形態や機能

▶21 日置真世（2014）『第5章 地域生活支援ネットワークサロンの実践から見たコミュニティエンパワーメント』 科研報告書「移行支援実践におけるコミュニティ・エンパワメントモデルの開発」（研究代表者：宮崎隆志）、p.81.

を変化させる²²。

佐々木は、この一節の後で「文学、音楽、造形美術（絵画、彫刻、建築、デザイン）、演劇、舞踊、映画などが、現在われわれが理解している芸術の諸分野であり」と論を続ける。つまり佐々木のこの定義は芸術概念の拡張を意図して書かれている訳ではないのだが、それにも関わらず、現在のOYOYOゼミにおけるアートの扱いを考える上で有効である。というのは、OYOYOゼミにおけるアートは、結果的に見て、既存の価値観の枠に囚われない精神の冒険性に根ざしていると言えるからである。ここでは創造活動の結果として生み出されたアートピースは勿論のこと、作品や活動を生み出す前提となる創造的精神のあり方自体が既にアートとして尊重されている、と言い換えてもよい。この考え方に倣えば、プロレスも美少女ゲームもマンホールも、アート活動の範疇ということになる。

また、芸術社会学の堀田真紀子は2014年に調査を行ったサンフランシスコの対抗文化的社会運動の現場報告に寄せて、ヨーゼフ・ボイスの言葉を引用しながらアート及びアーティストについて次のように論じる。

そこで提案したいのは、確実に自分自身の内なる力の源泉、内発的な権力から力を汲みあげ、そこから自分の全権と全責任において新しい世界をつくるには、いっそのこと、あらゆる人が自分をアーティストと定義するのが、よいのではないかということ。（中略）これには先例がある。「アートは自由の科学である」と言ったヨーゼフ・ボイスである。そもそもアートを創造するとき私たちは、尊厳にどっしり根を下ろし、私たちの中の新しい世界をつくる内発的権力の源泉をしっかりとつかんで離さない。それは私たちの本当の欲求、夢、ヴィジョンがわきでるイマジネーションの泉であり、私たちを癒したり、行動へと鼓舞する自発的で自然、常に新鮮であらゆるものを若返らせ、蘇らせる力の源泉だ。真正のアートはこの源泉をピンポイントで正確に掘り当てる²³。

上記は堀田が、日常実践において自分の見たい世界を今ここで自らの手によって作りだす活動について論じた一節である。堀田によれば「真正のアート作品の創造に動員される力と、尊厳に根ざす内発的権力は、少なくともその発生源においては全く同じ」なのである²⁴。本稿の対象事例OYOYOゼミにおいても、毎回の活動プログラムの参加者は、自分の感受性や生活史や趣味領域などを、語りや企画や作品などの形で他のメンバーの前に現前させる。社会の中で一方的な受け手であることをやめ、ささやかながら自らが発信者・創造者の側に立つ。これは紛れもなく個々の尊厳に根を下ろした創作や表現であり、アート活動と呼べるのではないか。

また、OYOYOゼミという趣味縁集団の中核テーマであるアートの扱い方について、レイブとウェンガーの正統的周辺参加論²⁵を踏まえるなら、OYOYOゼミという実践共同体において「これがアートである」という中心や中核概念がある訳ではない。OYOYOゼミでのアートとは、毎週の定例活動

▶22 佐々木健一（1995）『美学辞典』財団法人東京大学出版会 p.31.

▶23 堀田真紀子（2013）「ナウトピア ～直接行動によるサンフランシスコの対抗文化的社会運動～」『国際広報メディア・観光ジャーナル』No.17 p.57.

▶24 堀田（2013）p.57.

▶25 ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー（1993）『状況に埋め込まれた学習～正統的周辺参加～』産業図書。

などによって、その都度その概念を書き換えられながら立ち現れ、実践されてきた。いかなるテーマが持ち込まれても、アート概念を柔軟に拡張して対応できるような、しなやかで不定形な集団であり続けることが結果として常に選択されてきた。現行の社会システムや既存の価値体系に囚われず、その向こうを探る企画や提案について、全員が態度をニュートラルにして向き合える社会空間が、OYOYOゼミでの「アート」の領域において結果的に担保され続けてきたと言える。

これは必ずしも高邁な美術の理想や組織理念からの帰結ではなかった。筆者の4年にわたる参与観察を振り返ると、OYOYOゼミでの企画提案は「自分が本当にそれをやってみたいか」というメンバー個々の判断の集積で決まってきた。決定基準は内的モチベーションであり、自分が実際に面白がり共感できるかであった。OYOYOゼミのアートをめぐるこのような姿勢は、メンバー達が最大限に自分の興味関心事を追求できるよう、取り扱うテーマやジャンルについても極力融通をきかせた「伸びしろ」の多い運営をしてきた結果、自然と行き着いた態度と見るのが妥当であろう。

アート概念のこのような拡張は、メンバー達の多様性固有性を包み込むには都合がよく、全員にとっての「居心地の良いユルさ」を顕現させてきた。同時に一方では、強力なリーダーシップや規範が存在しないため、物事がとかく決まらないという組織としての脆弱性も併せ持つこととなった。

非効率性の許容、その場での決定を強制されないことなどが、前述した効率優先、経済性優先の現代社会における「生きづらさ」の対極原理として、OYOYOゼミの活動の底流となったことを、ここでは確認しておく。

4 OYOYOゼミの活動がもたらしているもの

打ち合せ以外は、メンバー個々の発表や企画提案が活動の中心となるため、各自が所属する多様な社会的文脈や個人的蓄積が、自然とOYOYOゼミの活動プログラムにも持ち込まれる。これらの多様性・異質性は場合によっては組織運営上の不協和音になりかねない要素でもあるのだが、OYOYOゼミの場合、それらを乗り越えられる運営力も同時に培われていた。そのような運営の特質は、次の2点に具体的にみることができる。

第一に、アート系プロデューサーによるサポートである。彼らは多様性・異質性の高いコミュニティの運営手腕に長けており、目立たない形で場の空気を受容と共感の方向へ向けてきた。例えば部員レクチャーで、あまりに特異な内容に参加者全員が沈黙してしまうような場合でも、「いやあ、面白いね」「これは海外事例の〇〇と似ている」など肯定的に口火を切る。それによって場の空気が和み、他の発言が続く場面が何度かあった。

第二に、数多のお宝鑑賞会や部員レクチャーなどを通じ、集団全体に相互の尊敬と許容の気風が醸成されていたことである。個々の固有性がコンテン

ツなので、多様性こそが場の面白さを作る。特に部員レクチャーでは講師とテーマが毎回入れ替わるため、メンバー間の序列が固定化されない。どんな発表も「いずれは自分の番」であり、「お互い様」の目線が働く。

また講師役のメンバーは、自分が大事にしているものについて一時間以上を語ってその日の主役となり、参加者に真剣に傾聴される経験をする。ここでは「いまだ語られなかった新しい語り」が創造され、OYOYOゼミはその新たな語りを承認し共有する「語りの共同体」として、また「物語の共同体」として立ち現れる²⁶。これらの経験は、発表者の自尊心や自信、自己効力感などを補強する方向に作用する。

こうして、人を分断し競わせる「生きづらさ」の抑圧を離れた形で、各自の固有性に根ざす内容が、OYOYOゼミで次々と発表されるようになった。ここでの発表が共感の原理によって傾聴されるであろうことをメンバーは経験から知っているからである。また、OYOYOゼミは週一回2～3時間程度の限定的な集まりであり、関与度合いは参加者自身がコントロール出来るという安心感も作用する。

ここでは社会的認知度の低いものや、果たしてアートであるのかさえ疑わしいような領域のものまで、既存の意味が一端保留される。「生きづらさ」に覆われた社会の中であって、日頃「存在していない」かのごとく息を潜めているような物事が、当事者自身の言葉によって立ち現れる。最近の事例では、性的マイノリティーのライフヒストリーや、長時間の集中ができない人でも10分程度で仕上げられる絵画技法のワークショップ、女装技術や競馬のレクチャーなどがOYOYOゼミで開催されてきた。社会の中で見えにくくなっている物事が眼前で可視化される体験は何よりもまず新鮮であり、知的な興奮と同時に自らの価値観への内省をも呼び起こす。

その時、語り手聞き手とも、社会で流通している既存の「意味」や「価値観」の一方的な受容者であることをやめる。内省や対話を通して、参加者は社会に対峙し疑問を投げかける主体性や対等性を自らに付与していく。宮崎が中間地帯の再構築の条件としてあげる「意味の交渉空間」の顕現である²⁷。

また、メンバー達は、お宝鑑賞会や部員相互レクチャー、OYOYO本制作などの活動プログラムを通じて、自らの体験や目線を「言語化する」経験を繰り返し持つ。それは自らの体験を改めて「意識化」することであり、少し距離を置いて「相対化」する作業でもある²⁸。毎週の活動の都度、対象やアプローチを変え、何度も何度も自分の固有性や経験が自分自身の言葉で語り直され、人生物語の中での意味が再構成されていく。ここで自分についての言葉を選ぶのは他人ではなく自分自身である。

過去二回の⑧「OYOYO本」の発行は、OYOYOゼミの当事者性の扱いを考える上で象徴的である。メンバーにはライターや元編集者なども居るが、文章技術によってOYOYOについて語る資格を限定することなく、二回とも参加可能な全員が文章やイラストを寄稿した。ここには、各人のオリジナルな表現には代替不可能な固有の価値があるという姿勢が、潜在的なメッセージとして表明されている。

メンバーは、自分自身の目線と言葉によって自分の感受性や趣味や人生に

▶26 野口裕二（2002）『物語としてのケア～ナラティブ・アプローチの世界へ～』医学書院 pp.180～181.

▶27 宮崎（2013）p.112.

▶28 佐藤（2013）pp.35～41.

▶29 佐藤 (2013) pp.35~41.

▶30 宮崎 (2013) pp.111~112.

▶31 宮崎 (2007) p.111.

ついて繰り返し語り、参加者に共感をもって傾聴される経験を重ねる。OYOYOゼミへの参加を通じ、メンバー達は本来の目的であるアート周辺での趣味活動の共有と同時に、自分を取り巻く社会に対しての当事者性や主体性、また自分自身への基本的な信頼感を増強する過程をも体験していると言えよう²⁹。

先述した「中間地帯」を論じる中で宮崎は「学習者を正統な参加者として認めることは、趣味であれ遊びであれ、学習者の経験を既に社会を構成する価値ある活動として認めることに他ならない」と述べる³⁰。正にそのような意味で、OYOYOゼミでは、メンバーが持ち込むあらゆる内容の趣味や経験を、活動の場の多様性を富ますものとして承認してきた。特に公開講座や企画展などのプログラムは、OYOYOゼミをハブとして各自の人脈や専門性や技術を社会に開くデザインであり、自分達の活動には社会的な意義と価値があるという有意味感をメンバーにもたらしめている。

また宮崎は「集団的に人生物語を構築できる場を協働で作り出すことは、現代に連続する基本課題である」とも述べる³¹。OYOYOゼミの活動プログラムにおいては、参加者個々の経験や感受性が、自分自身の選んだ表現で何度も語り直され、本人には客観化・相対化され、集団には承認されていく。この時、OYOYOゼミは各自が人生の出来事の意味を再構築する場としても機能している。

このように、OYOYOゼミはアートを巡る趣味縁集団であると同時に、他者と共感においてつながり、異質性・固有性を許容し、小規模ではあるが個人に蓄積された固有性や知識などの資源の社会的な価値化を行う社会空間、宮崎の論じる「中間地帯」としても立ち現れていると言える。設立当初の謳い文句「大人の放課後」という言葉に象徴されるように、市民有志が個々の趣味や余暇の楽しみを最大化するために集まっているOYOYOゼミの活動が、結果として「生きづらさ」が蔓延する現代社会において切実に求められるような公共性を担保している姿がここにある。「私」の最大限の追求が図らずして「公」への回路に繋がり、新たな公共圏の可能性すら兆しているのだ。

以上に見てきたように、OYOYOゼミは対等な部員同士が合議制で運営する集団であること、明文化された規約や暗黙の了解を作らなかったこと、序列や固定を極力避けあえて流動的な組織形態であり続けたこと、活動内容はアートを入口とした参加者全員によるコミュニケーションであること、既存の「意味」「価値観」を再交渉する場でありえたことなどが、コミュニティの基本的な性格を形成した。その結果、後期近代の日本社会で消失した「中間地帯」としての役割をも担うようになった。OYOYOゼミは、非効率性、決定までに長時間を要する、もしくは決まらない場合すらあるなどの組織運営上のリスクや不安定要素を抱えている。だが同時に、参加者個々の多様性や固有性の許容、相互の尊敬、新たな創造性の涵養、相互対話の醸成、社会参加への契機などにおいて最適な環境を準備し、結果的に構造的なエンパワメントの発動が準備されることになった。

5 OYOYOゼミにおけるエンパワメント

5-1 エンパワメントの発動条件

エンパワメントについて、OYOYOゼミの事例を検証する前に、まずは先行研究からその理論的な発動条件を確認しよう。

最初に、教育学の日置真世によるコミュニティ・エンパワメントについての分析を参照する。日置の対象事例は、障害児の親たちのネットワーク組織である釧路市のNPO法人「地域生活支援ネットワークサロン」である。テーマと活動内容はOYOYOゼミと大きく異なるが、そこから日置が導き出したエンパワメント発動条件は、OYOYOゼミに見られる諸要因と驚くほど一致しており、一種の普遍的な要因と考えることができる。

日置はまずコミュニティ・エンパワメントの中核理念を『「対話と協働」の場を重ねること』であり「思考停止に陥らない、構成員が思考し、それを他者（異文化）と交流、交渉し、実行し続けることにある」と述べる³²。そして、その最大の阻害要因は「役割や方法、ルールなどがなんとなくの雰囲気固定されること（「暗黙の固定化」）」であり、常に伝え合う機会を作ってこれを回避することが必要とする。続けて日置は、コミュニティ・エンパワメントの実現に必要な条件を次のように述べている。

▶ 32 日置（2014）p.97.

必要要素で説明すると活動の中に常に「主体性」「多様性」を保障し、その2つの要素を支えるために「受容性」「内省的」「対等性」を担保する³³。

▶ 33 日置（2014）p.98.

一方ではそうした基本姿勢、基本理念を実現するための媒介的な要素・手段として①出番・役割がある、②学びがある、③居場所になる、④出会いや交流がある、⑤敷居が低い、気軽、楽しい、⑥社会（外部）とつながることができる、という6つの要素を含み、それらをうまく組み合わせることで多様な取り組みが実施可能であり、それが分散性と言えるのではないかと考えている³⁴。

▶ 34 日置（2014）pp.98～99.

上記の日置の分析は、OYOYOゼミのコミュニティにそのまま当てはまる。OYOYOゼミの参加者相互の関わり合いや活動は、主体性、多様性を、楽しみのうちに誘発するデザインになっている。そしてOYOYOゼミの9種類の活動プログラムは、媒介的要素として日置があげる上記①～⑥の要素すべてを満たしていることが見て取れる。

5-2 OYOYOゼミにおけるエンパワメントの検証

今日のエンパワメント概念は、教育学、集団心理学、開発経済学、保健福祉学など用いられる領域によって定義に差異があるが、アート関連の領域で

- ▶35 安梅勅江 (2013)「新たな保健福祉学の展開に向けて：当事者主体の学際学融合研究とエンパワメント」『日本保健福祉学会誌』第19巻第1号。

この概念を専門的に論じた研究はまだ見当たらない。そのため本稿では福祉やビジネスといった領域特有の要因を含まず、コミュニティの普遍的な要素でエンパワメント実現と評価の指標としてまとめている保健学の安梅の研究を参照する³⁵。安梅によるエンパワメント評価の8指標は以下の通りである。

(1) 共感性 empathy

メンバー間、あるいはメンバーのプログラムへの共感性はどの程度か？ あるのかないのか、あるなら限定的なものなのか発展的なものなのか？

(2) 自己実現性 self-actualization

メンバーひとりひとりが、どの程度自己実現できていると感じているか？

(3) 当事者性 inter sectoral

メンバーひとりひとりが、人ごとではなく、自分のこととしてかかわっているか？

(4) 参加性 participation

メンバーひとりひとりが、どの程度参加していると感じているか？

(5) 平等性 equity

参加者が、プログラムの内容やフィードバックを平等であると感じているか？

(6) 戦略の多様性 multi strategy

ワンパターンではなく、さまざまな戦略を複合的に組み合わせてプログラムを遂行しているか？

(7) さまざまな状況への適用性 contextualism

参加者や環境が変化しても、プログラムは対応できるか？

(8) 継続性 sustainability

プログラムには、安定した継続の見通しがあるか？

筆者は、OYOYOゼミのコミュニティがエンパワメントの実現要件を満たしているかどうかを検証するために、安梅の上記8指標それぞれについて5段階から選択し、それぞれに自由記述欄を添えたアンケートを設計し、実施時点の部員メンバーから次ページのような回答結果を得た。

■OYOYOゼミ 部員アンケート集計結果

No.	質問	1	2	3	4	5	平均
Q1	OYOYOの活動プログラムについて共感できますか？	4	6	0	0	0	1.55
Q2	OYOYOは、あなたの個性や才能を発揮できる場になっていると思いますか？	2	7	1	0	0	1.82
Q3	OYOYOの活動に自分がどのくらい関わっていると感じていますか？	1	4	4	1	0	2.45
Q4	あなたは、OYOYOの活動と決定に、どの程度参加していると感じていますか？	1	4	2	2	1	2.73
Q5	OYOYOの企画や運営の決定、情報連絡について、平等であると感じていますか？	3	2	5	0	0	2.18
Q6	OYOYOは、ワンパターンではなく、さまざまな戦略を複合的に組み合わせて多彩なプログラムを実現していると思いますか？	6	3	0	0	0	1.45
Q7	OYOYOは今後、環境が変化しても、プログラムは対応できると思いますか？	3	1	1	4	0	2.70
Q8	OYOYOの活動プログラムは、今後も安定して継続できると思いますか？	2	3	2	2	0	2.27
五段階評価：①非常にそう思う ②まあそう思う ③普通 ④あまりそう思わない ⑤全然思わない							

実施日：2014年8月21日、対象：現OYOYOゼミ部員、有効回答数11名

回答の平均値としてレベル1（非常にそう思う）台を記録しているのが、Q1の共感性、Q2の自己実現性、Q6の戦略の多様性であり、他の設問もすべてレベル2（まあそう思う）台に回答が集中している。

レベル2台後半となっているQ4とQ7については、背景の補足説明が必要である。Q4の参加性が2.8と低いのは、本業が多忙で欠席が続いているメンバーが5（全然思わない）で回答、他にも自分の関係するイベントや打ち合せのみに参加する活動形態をとっているメンバーが4（あまりそう思わない）で回答しているためである。この二人の回答を外して集計するとQ4の平均値は1.9となり、常連参加メンバー全員がOYOYOゼミへの高い関与度を自認していた。

Q7の継続性についても、背景の考慮が必要である。設問の「環境が変化しても」の文言で、回答者達は人間関係や運営などのコミュニティ内の要因に先んじて、OYOYOが入居する第2三谷ビルの存続を想起したことが推測されるからだ。同ビルは都心の一等地にありながら1963年建造の老朽物件であり、大家の意向次第で、いつ取り壊しの話が起きてもおかしくない。このことは日頃の打ち合せでもよく話題に上る。故にQ7の回答値は、この背景の反映を加味して読み解くべきではないかと思われる。

以上のアンケート結果からみて、OYOYOでの日々の活動実践は安梅の提唱するエンパワメントの8指標をすべて充たしており、エンパワメント発動に最適化された環境がOYOYOゼミのコミュニティに期せずして準備されていたと言えよう。

5-3 なぜOYOYOゼミのコミュニティにエンパワメントが起こるのか

では、なぜOYOYOゼミでは、本来意図していなかったにも関わらず、エンパワメントの発動に最適な環境を備えることになったのか。筆者は以下2つの要因を想定している。

第一は、日々の活動実践から自然に形成されたOYOYOゼミのコミュニティの性格である。規約や決定権の序列がないことは組織運営のリスク要因でもあるが、その一方で、全員対等、発言権の保証、多様性の歓迎、何を発言してもまずは許容されるであろうという限定的な信頼感、安心感、自発的な参加に基づく拡張性の高い活動などが醸成され、後のエンパワメント発現のベースを築いていた。

先述したアンケートで「OYOYOはあなたにとって、どういう場所になっていますか？」という自由記述欄の回答のうち、上記の議論に関連すると思われる数名の記述を、本人の許可を得て以下に転載する。

時間の共有スペースと情報交換と新しい人脈の場。

街中で安心できる場所。いろいろな人々とあった場所

日常の休息の間。社会活動および復帰における勉強。生涯学習。

最近休みがちになりましたが、今でもOYOYOは憩いの場です。

知的好奇心を刺激してくれる場所。

自分の存在を認めてもらえる場所。

今も最初と変わらず、場所としては好きなところ。そして、仕事や家庭や他の場所と同じく、義務と責任がともなう所です。

これらの回答から、メンバー達がOYOYOゼミを新たな出会いや学びの機会、自分の存在が承認される居場所として考えていることが伺える。

前述したように、OYOYOゼミの活動は、メンバー個々の企画提案で成り立つため、自然に各自の社会的文脈や感受性や生活史が持ち込まれる。発表は場の多様性を富ますものとして歓迎される。各自の固有性の発現と語りを集団で共有し承認する時間が活動に幾重にも組み込まれてきたのだ。

第二に、アートをテーマとしたがゆえに、多彩な社会的文脈からの参加メンバーの軟着陸が可能となるような、ニュートラルな緩衝地帯を顕現しえたのではないかと考える。OYOYOゼミは、経済性や効率性など既存社会の価値体系に対する「遊び」(＝大人の放課後)としてアートを巡る活動を展開する、個々の能力や専門性、趣味嗜好、経験の固有性などの循環に支えられた社会空間である。多彩な社会的文脈から集まる部員が持ち込む多様性や固有性を抱えこむために、活動内容や相互の序列を固定化することを避け、運

営上のリスクを負いながらも結果的に不定形で流動的なコミュニティであり続けてきた。現在のメンバー達は、自らの趣味や得意分野に社会の中での発現の場をもたらし、新たな学びや他者との出会い、価値ある体験を共有して楽しみを最大化するために集まっている。その結果、OYOYOゼミでは、「生きづらさ」をもたらし従来の社会システムとは別の価値観や相互承認と許容に基づく関係性が志向され、個々の人間形成や主体性や当事者性の回復、潜在能力の開花の場（＝失われた「中間地帯」）としても機能するようになった、と言えるのではないかな。

冒頭でも一部を紹介したが、ゼミ部長でアートプロデューサーのS氏は上記アンケートについての筆者の追加取材に応じ、次のように自らのOYOYO観を回答してくれた。以下はその抜粋である。

自分とスペースの関わり方は、ある時期から「自分が手がけたものが、自分の手を離れ、自分でも予想しないところに転がるおもしろさ。それこそ、本物の場のクリエイティビティではないか」と考えるようになりました。（中略）

OYOYOは、主催者がはっきりとしたイメージコントロールができなかったので、たまたま誰でも受け入れるようになった。

その中には、最先端の文化やまちづくり的なものも時折あるけれど、都市の中で生きづらいかもしれない人々も自然に集まっている。

それこそ、（補注：触れたがらない人も居る³⁶）本当のまちの問題だし、何がまちに足りないのかリアルに見えることだと思う。

都市の中心部は、通常、経済の中心の場として考えられるけど、本当はそこにはいろんな問題や想いがあるということ。

そこに底辺から支える力と魅力が見えるかもしれない³⁷。

S氏のコメントからは、OYOYOの想定外の変化が始まった時、トップダウンによる軌道修正を行うより「もしかしたらこっちの方が面白いかもしれない」と逸脱や変化を現場と共に楽しんだ、アートプロデューサーならではの柔軟さが伺える。OYOYOゼミは中央統制的な統御によらず、参加者とコミュニティが同時に変化し続ける実践共同体であり続けてきたのだ。

参与観察全体を通じて筆者が絶えず驚かされたのは、一般の市民個々に潜在する能力や専門性の高さであり、趣味や人生経験の豊穡であり、それらの潜在資源の社会的価値の高さであった。職場以外で一般市民の人的資源を社会に還元する回路が現代社会ではごく限られており、その自由な発現の機会があまりにも少ない。OYOYOゼミの事例に見たように、趣味縁などの遊びの場を借りて、各自の潜在能力や固有性を社会へと開く社会空間をデザインし、そこで参加者が存分に遊び合うことは、個々の人間性回復の場としても社会全体の人的資源の活用としても、また新たな創造を社会にもたらし協働の場としても非常に有効であると考えられる。アート・コミュニティには、その意味でも今後の大きな可能性があるのではなかろうか。

▶36 固有名詞の特定を避けるため筆者が本人に許可を得て表現を変更。

▶37 2014年12月11日筆者の追加取材に対しメールで回答を得た。

6 むすび

OYOYOゼミは、全員対等、自主性と当事者性の尊重、多様性を極力許容しようとする柔軟性を持つコミュニティであることにより、エンパワメント発動に最適化した条件を期せずして備えるようになった。これは「生きづらさ」に覆われた現代社会に風穴をあける、宮崎の「中間地帯」機能を持った社会空間として、個々人の専門性や固有性を受け止める機能も備えるようになった。

アートをテーマに用いることで、ニュートラルで多元的な意味を持つ「中間地帯」としての社会空間を現代社会に実際に構築し、コミュニティ・エンパワメントを誘発してゆくような今後の可能性も期待される。なぜなら、社会におけるアートは往々にして「遊び」や「逸脱」の領域に位置づけられることが多く、既存の「意味」「価値観」を相対化したり保留したりするのに向いている。宮崎が述べる「意味を再交渉する社会空間」を構成するには非常に有効と思われる。

アートをコミュニティのテーマとしたことに加えて、OYOYOの場合、「部活制」を採用した構想段階から市民の自主運営が想定されており、必要な資金・労働・時間すべてを参加者が手持ちの資源を出し合って賄うしかない運営状況にあった。その結果、OYOYOゼミは構成メンバー達の高い参加性・当事者性・主体性に支えられざるを得ず、これらが対等な関係や序列の非固定化、空気の緩さ、相互のリスpektなどの副産物を準備し、後のエンパワメントの発動基盤となった。数々の制約や偶然の要因の積み重ねが、現在のOYOYOゼミを形作ってきたと言える。

OYOYOの事例から、今後の若者の移行支援を媒介するような新たなコミュニティのあり方、個々の市民に潜在している人的資源の再社会化、新たな形での社会参加、および都心の新たな公共空間創出の契機などを、可能性として読みとることが出来るだろう。

OYOYOゼミに見られる活動実践とその派生効果について、本稿では「生きづらさ」「中間地帯」「エンパワメント」などの概念を援用して事例を読み解くことを試みたが、上記の可能性を含め理論的な検証の余地がまだ多く残されている。また今回は触れることが出来なかったが、芸術療法をめぐる先行研究と照らし合わせることで、より理論的な分析を深められると考える。これらについては今後の研究課題としたい。

謝辞

2010年から現在まで資料やインタビュー調査にご協力頂いたOYOYOの歴代部員と関係者の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

参考文献

- 安梅勅江（2004）『エンパワメントのケア科学～当事者主体チームワーク・ケアの技法～』
医歯薬出版株式会社。
- 安梅勅江（2013）エンパワメント科学：新たな実践知の展開に向けて、筑波大学エンパ
ワメント科学研究室ホームページに掲載。
<http://square.umin.ac.jp/anme/research/anme/EMP2.html> 2014年9月20日最終閲覧。
- 安梅勅江（2013）エンパワメント科学入門、筑波大学エンパワメント科学研究室ホームペ
ージ
<http://square.umin.ac.jp/anme/EmpowerScience.pdf> 2014年9月20日最終閲覧。
- 高橋勝（1992）『子どもの自己形成空間』川島書店。
- 田中優子（1986）『江戸の想像力—18世紀のメディアと表徴』筑摩書房。
- 田中優子（1999）「変貌する知的コミュニティ」国立国会図書館編『出版文化と図書館—
デジタル時代の知の行方—』国立国会図書館編。
- 田中優子（2008）『江戸はネットワーク』平凡社。
- 宮崎隆志（2013）「意味空間としての場の発展論理」『社会教育研究』第31号。

（平成26年10月17日受理、平成26年12月26日採択）